「旅で芽生えた友好の芽を枯らす事のないよう育てていきたい」

思想の歴史を学び、21世紀の新たな思考の枠組みを

抗日戦争記念館見学

記念館館長との懇談

■北京

一行の最後の目的地である北京では、故宮、天安門広場とともに蘆溝橋と中国人民抗日戦争記念館を訪れた。

抗日記念館では、献花ならびに小松電機産業より「抗日戦争史研究暨和平教育基金会」に100万円を贈呈した。その際、小松氏より「世界人類未来の恒久平和につながる知的共有財産の創造」が趣意書により説明されたことがきっかけになり、抗日記念館の資料をHNS研究所が無償で使用できることが決定、調印が行われた。最終日の晩餐会には、中国側から抗日戦争史研究暨和平教育基金会名誉理事長・白介夫氏をはじめ、抗日記念館長・張承鈞氏、北京大学教授・張碧清氏ら26名もの人々が参加、「一行の謝罪の気持ちと平和への思いが中国の方々にも通じた結果、このようなすばらしい宴になった」と参加者も感動したという。

5日間というハードスケジュールにもかかわらず、20代から80代までの全ての参加者は、一つでも多く物事を吸収しようと、お互いに助け合い、中国の様々な事柄に出会い、学んだ。参加者の一人の「この旅で芽生えた友好の芽を枯らす事のないよう育てていきたい」というコメントは、全参加者の旅行に対する思いを代表している。

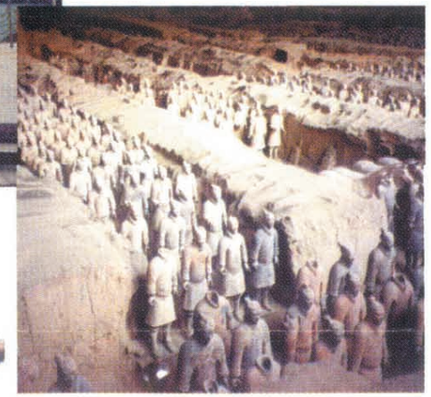
7代の皇帝が資金を投じて孔子廟を拡張して（曲阜）

空海記念碑

■西安

シルクロードの東の基点として栄え、唐代の都・長安として知られる西安で一行は、兵馬俑坑博物館、『西遊記』で知られる唐の高僧、玄奘三蔵ゆかりの大雁塔などとともに、当時、日本人の思想や宗教の面で大きな影響を及ぼしている」と考える小松氏をはじめとする一行は、その原点となった地ともいえる青龍寺で当時の時代背景と思想に思いをはせた。

また、小松氏は2日、西安市長を表敬訪問。日中友好はもとより、恒久平和のための普遍的文化を創造すべくさらに尽力していくことを約束した。


西安兵馬俑

■曲阜

山東省曲阜は仏教とともに日本人の思想文化の源流となっている儒教の祖、孔子や孟子の故郷だ。ここ曲阜では、孔子廟、孔子林、孟子廟、孟子林、孔子文化大学（前号12面特集を参照）を訪れ、儒教の思想がどのようなところから生まれたのかを体感した。

同大学では日本語科の学生と交流、HNS研究所が出版した本を中心とした日本語の書籍100冊を寄贈した。一行が訪れた日はちょうど、中国でのゴールデンウィーク の中日にあたる4日であったにもかかわらず、多くの学生が一行を歓迎するため故郷に帰らずにいてくれたという。参加者の女性の一人は「こんなに歓迎してもらえて、本当に嬉しかった」とその感動を語っている。

孔子文化大学、孔子像の前で

孔子の墓所

孔子文化大学に100冊の本を寄贈し、記念品をおくられる

曲阜市長との懇談夕食会

小松電機産業株式会社社長　小松昭夫氏

なぜ小松氏は、自身の会社の事業とは一見、直接関係のないと思われるこのような大旅行団を組織して、中国を訪れたのか？　それには小松氏の哲学が深く関係している。

小松氏は、我々日本人の思想に、日本の地理的位置と季候にあわせ、仏教、儒教が大きな影響を与えたと考える。今回の旅のルートは、まさにその思想の歴史を辿ったものなのだ。

「空海が仏教を学んだ西安、儒教の源である曲阜、現代の戦争の歴史に欠かせない北京の中国人民抗日戦争記念館、それら日本の思想の歴史の一端をなしているものを74名の人々に見せたかった」という。

小松氏は、「今を生きる我々は悠久の人類の歴史に対して、21世紀の新たな思考の枠組み、文化を創造する義務と責任を負っている。ヨーロッパの二元論、弁証法とも融合した新しい思考の枠組みだ。それはまだ人類には見つかっていないとされるが、ビジネスの思想家とよばれるアメリカのスティーブン・R・コヴィー博士の著書『7つの習慣』が、実とその社会的背景を研究、活動するなかから新たな文化創造がはじまる。大阪の小学校で公務員出身の男に児童ら23名が殺傷され、8名もの命が奪われた事件をはじめ、今日本国内でおこっている様々な奇怪な事件は、歴史への直視をおざなりにしてきた結果以外の何者でもない。このままでは、同じ過ちを繰り返す可能性を否定できない」と小松氏は考える。

総勢74人という今回の旅行を組織するのは、小松氏にとっても大変なことだったであろう。それを成し遂げた一番の理由は何か。小松氏は「事業のためだ」という。小松氏は「会社」という概念を、「家業」、「企業」、「事業」に分けている。

「家業」は家族が生きていくための生業、人の我欲の追求を続けるのが"企業"、その我欲を公益と同化させ、理想的な地球社会へ一歩ずつ誘導するのが"事業"だ」と小松氏は言う。

事業家として、人の心のインフラ整備を目指す小松氏。今回の旅で、こんなにたくさんの人々の賛同を得られ、中国各地で大歓迎を受けたのも、人々がその志に心を打たれたからであろう。今後も、小松氏は、人々にそのような感動を与え続けていくに違いない。一